

国語

◆全学部・全学科◆

(六〇分)

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

山形県金山町は、杉の産地と山形米で知られる、農村でもあり山村でもあるような町です。中心部はちょっとした町を形成していますが、その周辺には、山に囲まれた谷にそって山村的な集落が点在しています。

その集落のひとつに滞在していたとき、私は村人から面白い話を聞いたことがありました。それは時間と村の暮らしについての話です。

この集落には、長い間時計は存在していなかった、と村人は話をすすめました。村に時計が入ったのは、日露戦争後のことで、それには次のようないきさつがありました。日露戦争のとき兵隊に行き、帰村した村人が世の中には腕時計というものがあることを、「発見」して帰ってきたのです。彼は他の村人に、腕時計についてあれこれ話し聞かせました。

1

、うまく伝えることができません。なぜなら、他の村人は誰一人として時計というものを知らなかつたのですから。

確かに、時計のフキユウと戦争とはミッセツな関係をもっています。第一次世界大戦では、主として塹壕を掘り、突撃する戦法がとられています。そのとき、むずかしかったのは、どうやったら大勢の兵隊が一緒に突撃できるかということでした。はつきりした合図を出せば敵に知られてしまします。この問題は、シギ官に時計をもたせることで解決しました。ですから、日露戦争のときも将校たちは、おそらく腕時計をもっていたのだでしょう。

帰村した元兵隊氏は、ついに自分で腕時計をゴウニユウすることを決意したのでした。彼は苦勞して、ドイツ製の腕時計を手にしたといいます。これで村人は、時計というものを知ることができるようになりました。ところがこの腕時計は、村人にとっては、何の役にも立たなかつたのです。なぜなら時計をもっているのは彼一人ですから、時計の用をなさないのでした。

そんな状態が長くつづき、昭和に入ったとき、村と時計の關係に大デンカンがおきました。御大典記念の柱時計が売りだされ、村人は競ってそれを買いました。このときから、村に時計のある暮らしがはじまったのです。ところがこの柱時計は、とても信頼のおけるものではなく、このときから村の子どもたちの仕事が新しくふえました。時刻がおかしいと思つたときは、子どもが走って元兵隊の腕時計氏のところに時刻を開きに行きます。そうすると腕時計氏は、その子が家まで何分くらいかかるかを考えながら、「家に着いたら何時何分と言いなさい」というように教えてくれます。

村人によると、その腕時計はいつでも正確に時を刻んでいたといいます。もっとも、それを証明するものもありません。なぜなら、「正確な時計」はその腕時計しかなかったのですから。しかし、こうして腕時計を標準時間とする村の暮らしがはじまったことは確かでした。

この子どもの仕事は一九五〇年代の中頃に終了します。その頃、村に電灯線が敷かれ、家々がラジオをもつようになったのです。腕時計氏の役割は、ラジオの時報にとつて代わられました。

考えてみれば、長い間人間たちは時計などというものを、もっていなかったのです。それでも城下町などでは、お寺の鐘の音がおおよその時刻を告げていたでしょうが、農山村にいわば、そんなものも存在しないのが普通でした。ところが村人によると、「その時が来たことを告げる」システムは、昔からあったということです。それはこの村では、独特の木をたたいて音をだし、その音を聞いた村人がまた木をたたくという方法で伝えられていましたが、その音は一

キロくらい先まで聞こえました。

といっても、別に十二時の時報を告げていたわけではありません。そろそろ村祭りを始めるから出てくるようにとか、昔は田植などは結のかたちで村人の共同労働としておこなっていたから、田植の開始を伝えるとか、つまり「その時が来た」ことをこの合図は教えていたのです。それは村人にとっては、生活上の合図でもありました。そしてこの「時」をつくりだしていたのは村人自身でした。村人自身が時間をつくり、それを教えていたのです。

村の時間とはそういうものだった、と村人は振り返ります。それに農民の暮らしにとっては、別に時計の時間は必要でもありませんでした。農民は陽が昇る頃に起き、春から夏の間は一度水田の水の様子をみに行きます。水温や気候を確認しながら、水田に入る水量を調整します。それがすむと家にもどり、朝食となり、つづいて田畑のその日の仕事を開始します。何度か休息をとり、太陽が上空にさしかかった頃昼食をとり、陽が暮れば家に帰ります。時計がなくとも、労働も生活もうまくいくのです。あとは、皆が集まる「時」を伝える方法があれば、それで十分です。

以前は農民にとっては、「時」は自分たちの労働や生活のなかにありました。時計のような外部化された時間は必要なかったのです。

(内山節「子どもたちの時間」による)

(注)

- 1 塹壕Ⅱ戦場で、歩兵が敵弾を避けるために作る防御施設。
- 2 御大典Ⅱここでは、昭和天皇即位の儀式のこと。
- 3 結Ⅱ農作業のときなどにたがい力を貸し合うこと。

問一 二重傍線部①・②の本文中での意味として最も適切なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- ① 点在して
- [1]
- ① 一箇所にまとまって
 - ② 生活の灯をともして
 - ③ かろうじて存在を保って
 - ④ あちこちに散らばって

- ② いきさつ
- [2]
- ① 出来事の詳細
 - ② 偶然的巡り合わせ
 - ③ 時代の流れ
 - ④ 事件の結果

問二 空欄 1 に入る言葉として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

[3]

- ① ゆえに ② ところが ③ また ④ つまり

問三 傍線部 a「何の役にも立たなかったのです。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

[4]

第二 問

次の文章は一九六九年に発表され、当時の社会状況に触れたエッセイである。これを読んで、後の設問に答えなさい。

上京する電車で、北鎌倉を通りながら例の如く窓の外に流れる繁った木々を見まもっている。歳末まで暖かかったせいであろう。どの谷戸にも、梅の花が白いのが目立つ。かなりの数が、家々の庭に分かれて、遠く近く在る。寺々に集められた梅林の花もよからうが、こうして思い思いに別れて在る花の木も美しい。それにしても山の尾根の松の木を列を立ち枯れさせて平気でいる市役所の無神経さが気になっているのだが、ちょうど雨になろうとするとどんより霧が降りた朝で、その中に夢のようにうかんで咲いている梅の木の方に心をひかれた。

その、点々と花の咲くこずえにかぶせて、近ごろグラフ雑誌で原色で発表された宇宙から見た地球の写真を私は想っていた。地球は青くて美しいと宇宙飛行士が話したが、画でもまるく碧玉のような色をして蛍光を放っているように見えた。殊に、岩の砂漠のように荒々しい月の表面に差し昇っている青い地球の姿は輝くように美しいものであった。どんな宝石も、この含蓄のあるゆたかな円い結晶とはくらべものにならないような気さえた。

月は日本の文学で古くから、花と共に美しいものの代表で、人間の間に千々に想いを通わせる手段でもあった。これが、ひどいあばた面で、水気などなくパサパサな顔をしているのでは、かぐや姫の出る美しい竹取物語も、可憐な月の兎も変なものに成ってしまった。スペインの国土のことを、牛の皮のように月には、乾いていると形容した人があるが、スペインでもオリブの木が点々と山畑に見出されるし、村の真ん中につだけける石の井戸も見つけられる。月には、それもない。それにくらべると、我々の地球は、冬も梅の花を咲かせて如何に瑞々しく美しいことか？ 私は、昔からの日本人が（中国人もだが）月を見て感慨を深くしたように、一度宇宙に飛び出して吾が地球が空中に月よりも皓々と輝く姿をながめて見たいのだが、この方はどうやら実現見えず、これからは発表されるカラー写真を待つことに成るだろうが、夢に想うだけでも楽しい。生れて来た人間のひとりひとりが、一本ずつ花の木を植えることにしたら、未来の地球はどんなに美しくなるだろうか、と言ったのはロシアの作家、お医者でもあったアントン・チェホフである。確かにそれに違いないのだ

が、人間のだれもが花の咲く木を植える小さい
II をつましく果すものでなく、反対に大規模に地球から縁を剥ぎ取り、ヴェトナムで罪のない人殺しを続け、文明国に限ることだが大学で市街戦を演じている。それでも地球は動いているし、青く中空に美しい。だれも花の木を植えはしない。敷き石で頭の割りっこをして血を流す。

やはりヴェトナムの殺戮は、やめさせたい。ひとりずつで花の木も植えたい。地上に在る悪いものを片付けて、都会の公害と同時に権力の思い上がりを排除して、遠見の美しい地球上の人間の生活を、近くで見ても醜くなくいやでない平和なものにしたい。チェホフの言うとおり、ひとりひとりがそうする気になれば、それが勢いとなり、地上の姿を変えられることなのだ。どうも自分ひとりの幸福だけを考えて済ましているのではないのだ。その上に、自分だけが正しいと信じて、他人が同じ意見にならないと敵視したり憎悪したりする人間の習癖が、一番人間の生活を悪くする。ナンセンスと一語で相手の言い分を否定する思い上がりを人間に許してはならない。これは意見でなく暴力なのである。飛行家で文士だったサン・テクジュペリの言葉を聴こう。彼は地面から離れて空を飛ぶのを職業とした。「人間の大地」を、見た男であった。戦争中地中海の空を飛んでいて遂に行方不明になって、明らかに死んでしまったのだが、チェホフと同じく、地球の人間の為に、生きてる言葉を遺して、青空に消えた。

「なるほど、君と僕とは意見が違う。それでよいのだ。それだからお互いに、ゆたかな考え方が出来るように成るのだ」
樹木に限らない。成長とは、そう言うものではないか。自分の考え方が正しいと信じているものは、その場に停止しているものだ。木なら立ち枯れる。一歩手前、葉が色つやをなくして萎縮し始めるシチュアシオンに在る。時に、彼と反対の意見が彼をまた蘇生させる。

(注)

(大佛次郎「人間と文明を考える―水の音」による)

1 谷戸 谷状の地形。

2 グラフ雑誌 II 写真を主体とした雑誌。

3 アントン・チェホフ II アントン・チェホフ（一八六〇年―一九〇四年）は、ロシアの作家。

4 ヴェトナムで罪のない人殺しを続け II 南北ベトナムの統一をめぐる戦争で、アメリカなどによる軍事介入が行われたことを指す。

- 5 大学で市街戦を演じている。大学のあり方などをめぐり、行政当局、大学教授、学生などの間で意見・主張が対立し、争いとなったことを指す。
- 6 ナンセンスに無意味。
- 7 サン・テグジュペリにサン・テグジュペリ（一九〇〇年―一九四四年）は、フランスの飛行家作家。
- 8 シチュアションに状況。

問一 傍線部(1)～(5)の漢字の読みを、ひらがな・現代かなづかいで記述問題解答用紙に記しなさい。

問二 空欄 I・II に入る言葉として最も適切なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | |
|----|-------|-------|-------|-------|
| I | ① 荒涼と | ② 堂々と | ③ 漫然と | ④ 晴々と |
| II | ① 権利 | ② 努力 | ③ 習慣 | ④ 義務 |

7 8

問三 二重傍線部①～③の本文中での意味として最も適切なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- ① 思い思いに
- 9
- ① ふんだんに
② それぞれに
③ おりおり
④ おもむろに

- ② 含蓄のある
- 10
- ① 多くのものを内に含み持つ
② 自然破壊の痕跡を持つ
③ 表層的な美しさを持つ
④ 豊かな資源を蓄えている
- ③ 覚束なく
- 11
- ① もどかしく
② 好ましく
③ 疑わしく
④ 恐ろしく

問四 傍線部a「昔からの日本人が（中国人もだが）月を見て感懐を深くした」というのは具体的にどのようなことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

12

- ① 遠見の美しさ故に人々の心に様々な空想を喚起したことから、月が古典文学のモチーフに多く取り上げられていたということ。
- ② 古くから豊かな土壌を持つ天体と捉えられた月が、かぐや姫の登場する竹取物語や兎の伝説を生みだしていたということ。
- ③ グラフ雑誌に掲載された宇宙に浮かぶ月の写真を眺めてみると、月の表面は思っていたよりも乾燥していたということ。
- ④ 月は花よりも美しいものとされ、月の光には人と人との間に意思を通わせるエネルギーがあると信じられていたということ。

問五

傍線部「だれも花の木を植えはしない。」とあるが、ここで筆者が批判している対象とはどのようなものか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

13

- ① 森林破壊の進んだ国が戦争を焚き付けて、緑豊かな隣国の自然を奪おうとしている現状。
- ② 地球での環境破壊や暴力が横行するなかで、自分の幸福のみを求める人々の無関心。
- ③ 遠見の美しい地球の姿に甘んじて、梅の木を植える必要はないとした市役所の判断。
- ④ 戦争を原因とする自然破壊を静観しつつ、近隣の地域に花を植えない市民の無気力。

問六

傍線部「自分の考えだけが正しいと信じているものは、その場に停止しているものだ。」とあるが、ここで筆者が伝えたいことはどのようなことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

14

- ① 他人の異論を認めずに、自分の信じるものために人を攻撃しては成長しないということ。
- ② 人間が停止せずに成長を続けるためには、他人の意見を全肯定することが必要不可欠だということ。
- ③ 立ち枯れる一歩手前の樹木のような人間にとっては、偉人の言葉だけが成長の糧であるということ。
- ④ 他者の考えのうち正しいと思われるものを参考にしない限り、人間も萎縮してしまうということ。

問七

本文の内容に合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

15

- ① 花や月の表面などの自然美は、文学作品を創作させる原動力となる。
- ② 自分ひとりの幸福を求めることによって、未来の地球を美しくすることができる。
- ③ 梅の花のつつましさもよいが、地球の青く雄大な美しさにはかなわない。
- ④ 地球上の人間の生活を平和なものにするためには多様な意見を認めあうことが望まれる。